

「教育臨床総合研究16 2017研究」

教員養成課程における副科学生を対象とした声楽指導法試論(1)

— グループ・レッスンの形態による —

An Essay on one Teaching Method of Vocal for Minor Students on Teacher Training Course(1)
— Depending on the form of Group Lesson —

狩野麻実

Asami KANO

(島根大学教育学部芸術表現教育講座)

要 旨

本稿では、初年次の副科学生を対象とした「声楽演奏法」の授業を、グループ・レッスンの形態によって指導するという特異な指導条件の下で、どのようにしたら着実な学習成果を得ることができるのか、また、1セメスターという短期間のうちに、最低限の音楽科教員としての基礎的な資質を身に付けさせるために行った授業実践を自省し、事前事後の質問紙調査によって、その成果と課題を明らかにしようと試みた。

〔キーワード〕 声楽指導法, グループ・レッスン, 教員養成

I はじめに

筆者は現在、教員養成課程において、副科学生を対象とした声楽演奏の指導に携わっている。ここで言う副科学生とは、声楽を専門(専科)としない音楽教育専攻学生のことを指す。本職に着任した当初は、声楽演奏に関する指導内容や到達目標をどのように設定したら良いのか、戸惑いがあった。教員養成課程の、しかも副科学生が対象であることから、声楽家養成の専門課程とは身に着けるべき力に根本的な差異があるのかもしれないと思ったからである。そこで、同様の教育環境から提案された幾つかの先行研究から考察を行ったところ¹⁾、声楽を学ぶ上で身に着けるべき力は、教員養成課程においても専門課程との根本的な違いはないと考えるに至った。

ただ、対象が副科学生であるから、学修内容を何点かに集約して明確に示すことや、実態に即した習熟度の設定が必要となる。また、当然ながら本学独自の教育環境と与えられた条件の下で、より効果的な指導方法の工夫も求められる。

前者の習得すべき学修内容の焦点化については、発声に関する3つのキーワードを学修目標として掲げ、集約を試みた。また、指導方法の工夫については、対象学生が「副科学生」であることに加えて、受講年次が「初年次」であること、そして「グループ・レッスン」の授業形態であること、さらに履修期間が「1セメスター」であるという4点に着目して、授業改善を試みてきた。

着任5年目を迎えるにあたって、本稿では、これまで携わってきた声楽演奏法に関する指導実践の成果と課題について自省を試みたい。まず、受講する現在の副科学生が求める「習得し

たい声楽の力」と専科学生の求める力との差異が無いのか、言い換えれば、筆者の「身に着けさせたい力」と合致しているのか、授業初回の質問紙調査によって考察する。次に、独自に授業改善を重ねた指導実践を、主に上述した4つの視点から論じる。最後に、事後の質問紙調査による習熟度の分析を行うことで、教員養成課程における副科学生を対象とした声楽指導法の成果と課題について論述する。

II 初回授業時の質問紙調査分析

1. 授業および質問紙調査の概要

本稿で研究対象とする授業科目は「声楽演奏法（基礎）」という科目名称で、教員免許取得のための必修科目として1年次前期に開設されている。筆者が担当する本科目の履修要件は声楽副科学生に限定されており、1学年およそ15名程度のグループ・レッスン形態を原則としている。受講学生の大半は高校を卒業したばかりの18歳で、声楽における学習環境や学習履歴も様々であることから、授業初回時に「身に着けたい声」についての質問紙調査を行っている。指導側の「身に着けさせたい力」との整合性をはかるためでもある。次項は平成28年度と同調査をまとめたものである。

2. 初回質問紙調査の結果

以下は、「あなたは、どんな声を使って歌い・表現していきたいですか？」という問いに対する自由記述回答のすべてであり、音質や音色に関するイメージを述べたものと技術の習得に関するものとで分別してみた²⁾。

音質や音色	<ul style="list-style-type: none"> ・高音がボーンとよく響く声でpになってもはっきりと聞こえるように歌いたい ・芯のある歌声にしたい ・厚みがほしい ・音の高低に関わらず、均等に美しい響きを持つ声 ・伸びのある声 ・声量の大きい声 ・安定した声 ・頭上の空間を響かせるような透き通った声 ・体や空間に響く声で歌えるようになりたい ・遠くまで聞こえるきれいな声で感情を自由に解き放って表現していきたい ・前に飛ばせるような響きのある声で歌いたい ・豊かな声を出したい
技術の習得	<ul style="list-style-type: none"> ・ビブラートができるようになりたい ・無理のない声の出し方を身に付けたい ・お腹から声を出す感覚・技術を養いたい ・自分の出したい（喉を使わない）声の出し方を目指したい ・声の出し方をバランスよく効果的に使って最後まで楽に歌いたい ・地声と裏声をなるべく分かりにくい歌い方を目指していきたい ・もっと太くてうねるような声も使い分けられるようになりたい（⇔音質） ・息を上手に使えるようになりたい ・音の跳躍を上手にしたい

これらの記述から、副科学生も、理想とする声や身に着けるべき能力への意識は、専門課程や声楽専科の学生と何ら変わりはないことが伺える。

3. 発声に関するキーワードの設定

このように発声に関しては、身に着けるべき根本的な技術やイメージが、専科と副科で大きく異なるわけではない。しかし「はじめに」でも述べたように、習得すべき学修内容を何点かに集約する必要性はある。筆者は、質問紙調査によって明らかとなった受講学生の求める力と、声楽発声に関するこれまでの科学的論考³⁾とから、「空間」「呼吸」「支え」の3点を学修内容のキーワードとして設定した。これらは、発声の上達を促すために不可欠な土台となるべき視点であり、これから声楽を学んでいく学生にとって、基礎的な能力を身に付けていく指針となるであろう。各キーワードごとに複数の意味や働きがあり、互いに作用しあって発声に関する基礎的力量的の向上を促すことを前提として設定している。指導の詳細については、紙幅の都合上別稿に譲ることとし、本稿では、主に各キーワードの授業内での意味付けや発声への作用について詳述する。

①「空間」について

主に口腔など首から上の空間を意味する。声帯の摩擦音を変換し、発声し発音をしている。声楽は声と言葉を扱うものであり、口腔は声の音色や響き、言葉の明確さ等に密接に関係している。ただ単に大きく口を開けることが空間の意識ではなく、どのようにしてどのような空間を作っているのかということが重要である。口腔の変化に関係するものとして特に軟口蓋と頭がい骨(上顎以上の部分)の動きに注目し、軟口蓋から頭がい骨まで、顔全体・頭全体の動きの意識の継続を促す。

②「呼吸」について

主にお腹の辺りまでを意識した呼吸、いわゆる腹式呼吸を意味する。息は肺に入り、外に吐き出されるという、生命維持活動としての呼吸を声楽発声のための呼吸に発展させていくことが必要である。呼吸にとって重要な役割をはたしている横隔膜の動きに注目することで、腹式呼吸へのアプローチを試みる。呼吸の際に起こる、肺の動きや横隔膜の動き、その動きに呼応して動く肋骨や胸骨等、体内の動きと体外の動きの繋がりを感じながら、声楽発声のための呼吸を意識的に行っていくことを促す。

③「支え」について

主に、下半身を意識することにより得られる支えを意味する。発声時に楽器としての体をどのように保っていくのか考えることは大切なことである。楽器としての体の保持は、発声・歌唱時の姿勢とも関係してくる。全身に力を入れて緊張させる、または固めるということではなく、必要な筋肉や器官の動きをもって楽器としての体を支えるということが重要である。上半身が制御されることが発声の固さや不自由さに大きく影響を与えることから、それを防ぐとともに、さらなる発展に導くことができるものとして、支えは発声のコアの部分であるといえる。主に腹斜筋や腹横筋等の腹筋の伸縮運動を意識し、発声の際に使っていくことや、骨盤や足等の器官によって体のバランスを取って構えるという意識を促す。

これらのキーワードを学修内容として設定した授業実践の内容や方法について、次章で自省を試みたい。

Ⅲ 授業実践

本授業において考慮すべき特異な教育環境や条件は、「副科学生であること」「初年次学生であること」「グループ・レッスンであること」「履修期間が1 Semester（半期）であること」の4点が挙げられる。以下、この4点について考慮すべき問題点を提示し、それらをどのように克服しようと試みたのか、対処法や授業方法の工夫についてまとめてみる。

1. 副科学生であること

〈問題点①〉

入学時点で、これまでの声楽演奏に関する経験や知識に大きな個人差がある。

〈対処法・工夫〉

初回授業時に、これまでの声楽に関する学習履歴の確認を行い、一人一人の現状について把握する。その上で、本授業では、発声に関する基礎段階から新たに学び直すことを、受講生全員に周知する。すでに一定程度の力量と経験値を有する学生にとっても、指導法の観点から学び直すことは、教員養成においては極めて有用な学びにもなり得るからである。既知の知識や技術を、指導者としての視線で捉えるよう促すことで、就学意識を高いレベルで保持し続けることができている。

〈問題点②〉

声を出すことに対して、苦手意識を持っている学生も見られる。

〈対処法・工夫〉

自分の声がどのように出ているか、ということについてのイメージが持てていないことが原因の一つであると考え、自分の声の自己分析を促した。例えば、「大きいのか、小さいのか」「明るいのか、暗いのか」「高いのか、低いのか」等について、発声時に自己分析させる。そこから、自分の声に対する改善意欲がわいてくれば、発声に対する抵抗感は次第に薄れていく。実際に授業では、《Voiceデータ》というワークシートを自己分析の補助として用い、一定程度の効果を得た。このワークシートは、声質に関する該当事項にあらかじめチェックを入れておき、後にそのチェックをもとに自分の声について分析し、文章としてまとめることで現時点での声について考察するものである。また、学生が自分の声を客観的にとらえることができるよう、指導者が定期的に個人の声を聴き、確認やアドバイスをを行うことも重要である。

〈問題点③〉

授業時間以外での学修の仕方が分からず、授業時間のみでの取り組みになりがちである。

〈対処法・工夫〉

毎回の授業では、始めにストレッチとプレストレーニング、発声を行うというルーティンで授業の導入を行っている。この一連の流れが、そのまま個々の自主学修に援用できるからである。

また、その時々での新たな課題や学修方法も随時紹介し、目的や意義とともに実施上の注意点も具体的に提示する。まずは、まねてやってみるところから始めるように促し、次第に自分の練習法を見つけていくよう、学びの順序を提示する。また、定期的に歌唱課題を課し、継続して声楽に取り組む時間を確保するよう促した。

2. 初年次学生であること

〈問題点①〉

高校を卒業したばかりであり、環境の変化や同期学生との関係づくり等、声楽の授業とは別の部分での緊張や葛藤が見られる時期でもある。

〈対処法・工夫〉

初年次学生が持つ様々な緊張をほぐしていくことが必要である。本授業では、授業始めにストレッチとブレストレーニングを欠かさず行うことにより、歌うための体の準備と共に、深い呼吸を感じることや、ペア活動等で学生同士または指導者とのコミュニケーションをとることによって、心身共にリラックスした後、活動へ意欲や高揚感を持って取り組むことができるように導いている。

3. グループ・レッスンの形態であること

〈問題点①〉

個人レッスンに比して、意図する指示内容が伝わりにくく、全員が同一の理解を得ているかどうかを確認することが困難である。

〈対処法・工夫〉

常に、発声に関して設定した「3つのキーワード」に関連付けて指導言を投げかけ、指導者の指示内容や学生の注意点が散漫にならないよう心掛けた。キーワードを絞ることで、複数の受講学生が学びに対する着眼点を共有しやすくなり、指示内容の理解度についても確認しやすくなった。また、指導者が定期的に個人の発声を聴き、学生の認識にずれや混乱が生じていないかどうかを確認し、必要に応じて修正を施した。

〈問題点②〉

他者の声と自分の声が混ざり、自分の声を認識しづらい。個人レッスンに比して集中しづらい状況がある。

〈対処法・工夫〉

ペア学習によるピアレビューの時間をできるだけ確保することで、個々の声を認識できる機会を増やし、集中力の保持も促すことができた。これらの活動は、発表する側にも聴く側にもメリットがあり、グループ・レッスンならではの利点と言える。特に教員養成課程の学生にとっては、このような他者評価の経験が、実際の教育現場で生かされることであろう。

〈問題点③〉

自分自身の言葉で表現する機会が限られてしまう。発言が特定の学生に偏りがちになり、学生の疑問点に対応できない可能性がある。

〈対処法・工夫〉

発言の機会を創出することも大切だが、大切なのは自分の力で疑問点を考え、導き出すことである。そのため、個別の歌唱発表をさせる前に、自らの表現意図を口頭で発表させ、思考・判断の自律を促した。また、ワークシートも活用し、個別の疑問点を丁寧に掘り上げるようにした。

4. 1 セメスターであること

〈問題点①〉

90分×15回という限られた授業時間の中で、目標とする実技力や理解度に到達することができるかどうか。

〈対処法・工夫〉

毎回のルーティン発声法による授業導入や、比較的平易なイタリア歌曲と教科書の歌唱教材⁹⁾を計画的に取り上げ、徐々に1曲にかける時間を短縮しながら効率的な学修の深化を促した。

また、授業時間外にもオフィスアワーを設定して個別の疑問点に丁寧に対応することで、単元ごとの学修到達目標に大きくおくれを取る学生が出ないように、心掛けた。

IV 取り組みによる成果と課題

1. 質問紙調査の実施

前章まで、教員養成課程における副科学生を対象とした声楽演奏法の授業実践について述べてきたが、本章では、セメスターの終わりに実施した質問紙調査の結果を分析することで、全体的な取り組みの成果を検証し、今後の課題について考察を行うこととする。この質問紙調査では、本授業で身につけるべき学修内容として設定した3つのキーワード、すなわち、「空間」「呼吸」「支え」の各々について、①現時点での技術習得状況、②授業開始時から現在までの学修伸長度、③発声技術の習得に際して現時点で困難に感じていること、の3点を尋ねた。①と②は5段階による自己評価であり、③は自由記述方式によるものである。調査対象者は平成28年度前期「声楽演奏法（基礎）」履修者15名とし、全員から回答を得た。

2. 調査結果と分析

(1) 頬骨や頭がい骨を上げる意識、また軟口蓋の動きによって作られる「空間」について

質問事項①	
よくできている	14%
できている	29%
どちらともいえない	36%
あまりできていない	21%
まったくできていない	0%

質問事項②	
よくみられた	33%
みられた	33%
どちらともいえない	27%
あまりみられなかった	7%
まったくみられなかった	0%

*①「どの程度習得できていますか？」

*②「今期を振り返って習熟度の向上がどの程度見られましたか？」

〈分析〉

「空間」認識について習得できていると答えた学生は43%で、全体の半数に達していないが、学修の伸長度については66%の学生が実感できたと答えている。このことから、学修目標そのものへの達成感はまだ十全とは言えないが、この授業を受講することによって、7割近い学生が力量の向上を実感できている、と考えられる。ただ、7%（1名）と少数ではあるが、向上度を実感できていない学生がいることから、更なる授業改善を行う必要がある。

質問事項③ 「技術向上のために困難を感じている点があれば、記述してください」

〈全回答〉

「あけているつもりでも声の響きがでない」「いろいろ考えながら歌うのは難しい」「無意識に頭がい骨を上げられる人になりたい」「E母音のときの口の空間がまだつかみきれていない」「表情をよくしつつ、きれいな歌声を出そうとすることが難しい」「顔が上に向いてうわずってしまう」「頭がい骨を上げる意識はあるが、歌に集中するあまり頭が下がってしまう」「自分でできているつもりでも、できていないときがある」「まだ地声が出る」「切り換えが難しい」「最初は意識していても。歌っていると忘れてしまう」「縦へと意識したり空間を作ろうとするが、すぐ崩れる」

〈分析〉

これらの記述から、口腔内の空間の状態と声の質とが関連していることを理解できている様子が伺える。ただ、自らが望む声質を得るための空間を保持する技術習得には十全な達成感を得られてはいないようである。このことは質問事項①や②とも整合性がある。今後は、空間の変化と声質との関連を実感できる歌唱体験の場を、数多く授業内に設定する必要があるであろう。

(2) 肋骨の動きや横隔膜の張りを意識した「呼吸」について

質問事項①	
よくできている	0%
できている	40%
どちらともいえない	47%
あまりできていない	13%
まったくできていない	0%

質問事項②	
よくみられた	27%
みられた	60%
どちらともいえない	13%
あまりみられなかった	0%
まったくみられなかった	0%

*①「どの程度習得できていますか？」

*②「今期を振り返って習熟度の向上がどの程度見られましたか？」

〈分析〉

質問事項①および②については、IV. 2. (1)の「空間」の場合と同様に、習得した技術レベルの自認度（40%）よりも向上度に関する実感が大幅に高い（87%）ことがわかる。技術向上が見られないと答えた学生はおらず、授業実践による一定程度の成果が見受けられる。た

だ、この「呼吸」については、声楽特有の学修事項とは言えず、管楽器や合奏分野の学修内容においても重要なキーワードの1つであることから、本授業だけの成果であるとは断言できない。

質問事項①および②における肯定的回答のポイントが総じて高いことも、その可能性を示唆していると言えるであろう。

質問事項③ 「技術向上のために困難を感じている点があれば、記述してください」

〈全回答〉

「スタッカートの時に横隔膜の動きがよくわからない」「よほど意識しないと横隔膜がちぢんでしまう」「声を長くのばしたりすると、お腹の支えが抜けていく感じがする」「意識すればできていると感じるが、曲になると感じない」「低い音域の声が出にくい」「低音と高音の変わり目が男声のファルセットのようになるのをどうにかしたい」「時々、横隔膜の張りが上手くやれているか不安になる」「まだ動かし方の定着ができていない」「スタッカートの時が難しい」「歌う前はすごく意識するがだんだん薄れていく」。

〈分析〉

肺の周辺だけでなく、横隔膜の動きにも意識を持っていることから、発声時には腹式呼吸を試みていることが分かる。また、スタッカートや横隔膜の張りの継続など、吸気よりも呼気において、ブレスコントロール方法に困難を感じていることが伺えることから、呼吸に関する一連の動きが実感できるように導きつつ、呼気のコントロールに焦点をあてた指導が必要であろう。

(3) 腹斜筋や腹横筋の動きや骨盤など、下半身を意識した「支え」について

質問事項①	
よくできている	0%
できている	53%
どちらともいえない	27%
あまりできていない	20%
まったくできていない	0%

質問事項②	
よくみられた	20%
みられた	54%
どちらともいえない	13%
あまりみられなかった	13%
まったくみられなかった	0%

*①「どの程度習得できていますか？」

*②「今期を振り返って習熟度の向上がどの程度見られましたか？」

〈分析〉

Ⅳ. 2. (2) の「呼吸」と同様に、この「支え」についても、声楽分野に限った学修事項ではないが、「空間」「呼吸」「支え」の3つのキーワードの中で唯一、①・②ともに肯定的な回答率が50%を上回っている。全体的に技術が身に着いたと実感できている学生は多いと言えるが、実感が得られていない学生がいることも事実である。個人差が大きいことから、特に、学修困難性を強く感じている学生に対して、個別の支援強化に努める必要がある。

質問事項③ 「技術向上のために困難を感じている点があれば、記述してください」

〈全回答〉

「緊張すると重心が上になる」「下半身で支えるという感覚がいまいちつかめない」「いろいろ試してみているが自分でできているか判断がつかない」「力が上に上がってくる」「力を入れるポイントは少しずつ分かってきたが、基準がよくわからない」「歌っているとすぐ忘れがちになる」。

〈分析〉

発声時の体の支えに関しては、身体内部の筋肉や骨格の状態を客観的に把握する必要があるが、通常、意識しない部分であるうえに個人差が大きいことから、善悪の判断をしづらい様子が伺える。身体の状態のみを意識するのではなく、発声時の声質と身体性との関連に注目させるよう促し、個々に応じた「支え」を自身で判断できるよう、指導方法を工夫したい。

V まとめ

初年次の副科学生を対象とした「声楽演奏法」の授業を、グループ・レッスンの形態によって指導するという特異な指導条件の下で、どのようにしたら着実な学修成果を得ることができるのか。しかも、1セメスターという短期間のうちに、最低限の音楽科教員としての基礎的な資質を身に付けさせることは、5年前の着任当初は、全く不可能なことと思われ、当惑した。

しかし、今回の実践研究が、その当惑感を払拭する新たな可能性の萌芽を導いてくれたように感じている。特に、授業内容を3つのキーワードに集約した試みが、どの程度の学習成果をもたらした、どういう点に課題が残ったのか、事後の質問紙調査によって明らかにすることができた。また、グループ・レッスンという、音楽実技力の習得を目的とする学修形態としては非効率とされる学修条件下で、ペア学習やピアレビューの視点を導入することで、逆にその学修環境ならではの利点を活用することもできた。

しかし、これらの指導上の工夫が一定程度の学修成果をもたらすことを実証できたとはいえ、未だ多くの課題が残存することも明らかとなり、取り組むべき新たな視点も見えてきた。授業を通して一定程度の力が身に付いたと実感できていたとしても、それが、学生自らが望む学修到達目標には達していないという現実や、グループ・レッスンの中で、並行して個別対応を行う必要性が顕在化してきている点などである。いずれも簡単には克服できない困難な課題であるが、学生にとって、本授業で得たものが、学校音楽教育の現場において的確な学習指導や支援に繋がることを念頭に置き、声楽の発声法や演奏法の指導について、課題の検証と更なる研究を継続したいと考えている。

〈注〉

- 1) たとえば佐々木(1993)などによる。
- 2) 類似回答については一つの文章にまとめ整理・統合した。
- 3) 白井(1993)や川井(2015)などによる。
- 4) 授業で取り上げたイタリア歌曲は、G.Giordani作曲「Caro mio ben」、G.B.Pergolesi作曲「Nina」、S.Rosa作曲「Star vicino」、G.Paisiello作曲「Nel cor piu non mi sento」である。

また、教科書の歌唱教材からは、村田邦彦作曲「翼をください」、中田喜直作曲「夏の思い出」を取り上げた。

〈参考文献〉

- 1) 川井弘子 (2015) 『うまく歌える「からだ」のつかいかた ソクマティクスから導いた新声楽教本』 誠信書房.
- 2) ガハプカ奈美 (2013) 「ヴォイス・トレーニングの授業における自己表現の展開：呼吸法を用いた活動の有効性」『京都女子大学発達教育学部紀要』第9号, pp.63-69.
- 3) 佐々木直樹 (2010) 「教員養成における発声指導の考察(1)」『島根大学教育臨床総合研究』第9号, pp.179-190.
- 4) 佐々木直樹/玉野佑佳/竹内美咲/伊東薫 (2015) 「教員養成課程における発声指導の考察(2)―発声理論と発声器官に着目して―」『島根大学教育臨床総合研究』第14号, pp.191-205.
- 5) 佐々木正利 (1993) 「教育養成大学における発声指導の基本理念と方法 ―呼吸法と声帯振動の理論を背景とした実践への提言―」『岩手大学教育学部研究年報』第53巻, 第1号, pp.137-155.
- 6) 白井淑子 (1993) 「声楽発声指導に関する考察(その1)」『甲子園短期大学紀要』No.12, pp.25-36.
- 7) 田中樹里 (2016) 「副科声楽教育に関する一考察」『東京藝術大学音楽部附属音楽高等学校研究紀要』第11巻, pp.31-41.
- 8) フレデリック・フースラー/イヴォンヌ・ロッド=マーリング (1987) 『うたうこと 発声器官の肉体的特質 ―歌声のひみつを解くかぎ―』須永義雄・大熊文子訳, 音楽之友社.
- 9) 松浦良治 (1990) 「初心者に対する声楽発声の指導法について」『新潟大学教育学部紀要』人文・社会科学編, 32(1), pp.129-134.
- 10) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社
- 11) リチャード・ミラー (2014) 『歌唱の仕組み その体系と学び方』岸本宏子・八尋久仁代訳, 音楽之友社.
- 12) 若松勉 (2015) 「声楽初心者のグループ授業における総合的・多角的取り組み」『国立音楽大学研究紀要』50, pp.315-326.